

# 「壁面構成」による造形表現指導の効果 —学内環境を活用した授業実践—

加藤友彦\*

## 要約

本研究は、保育者を目指す学生の造形表現の授業において「壁面構成」を題材とすることで学習効果があることを検証するものである。

保育・幼児教育の中で保育室・教室内の装飾として広く取り入れられている壁面構成を題材とすることで、次の4つの効果を期待した。

- ①保育・幼児教育における造形表現の意義を考察できる。
- ②学習活動の中で造形表現の多様な知識・技能が習得できる。
- ③共同制作をすることによって、構想、表現活動、展示、鑑賞の場面で多様な学びができる。
- ④空間を装飾することで学内環境を整美できる。

学習活動の様子と学習後の振り返りを経て、題材の適切さと学習効果が明らかになった。また、保育現場で活用できる題材であるかを検証するために、保育者にアンケート調査を行った。その結果、保育者からも一定の支持を得ることができ、題材の適切さが明らかとなった。

今後の課題は、今回の授業実践が他学の学習活動でも、同様な効果があるかを検証することである。

キーワード：保育者養成、造形表現、壁面構成、授業実践

2020年9月27日受理

## はじめに

筆者は短期大学の保育・幼児教育学科に勤務して3年目である。日々、学生が保育現場で働いたときに必要な諸能力を、授業を通してどれだけ伝えることができるかを考えている。保育者養成校（以下、養成校）の短期大学に入学した学生の大半は、2年後には保育現場で働くことになる。限られた時間で、保育・幼児教育の専門職として必要なこと学ばなければならない。その中の1つに造形表現がある。

保育者が造形表現の援助・指導を行うためには、保育者自身に造形表現の豊かな経験が必要であると

考える。しかし養成校の学生は明らかに経験不足である。図画工作や美術の時間数の削減、生活環境の変化によると推測される。この状況に対して筆者は、造形表現の基礎学習として多様な表現材料を用いることが有効である考え、授業を実践し報告した。<sup>1)</sup>

今回、基礎学習に続き、保育現場で役立つことを想定した授業を実践した。本稿は学内環境を活かした「壁面構成」の学習効果について報告するものである。

## 用語の定義

本稿では用語を次のように定義する。

\*大阪健康福祉短期大学

連絡先：加藤友彦

〒690-0823 島根県松江市川津町 4280

大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科

E-mail: t.kato@kenko-fukushi.ac.jp

- ・「制作」と「製作」の使い分けはせず「制作」に統一する。本稿では学生の造形表現を扱い、子どもの表現を想定して表現活動を行う。学生の表現は、作業性のある活動も含まれる。しかし、表現意図を持つ活動であるから「制作」を用いることが適切と考える。
- ・壁面構成は保育室内の装飾等を目的とし壁面装飾とも呼ばれている。また、保育現場では壁面と呼ばれている。保育室内の装飾等を目的とした場合は壁面とし、本稿で取り上げる題材は「壁面構成」とする。

## 1 造形教育

### 1-1 造形教育の課題

高橋（2001）は、美術教育の構造について次のように指摘している。就学前造形教育、図工美術教育、大学美術教育はそれぞれに独立した山である。そして、「三つの山は、別々の山だが裾野は接していると考えた方がよいだろう。なぜなら、美術における造形思考、表現意図、表現への内発性などは、共通だからである。むしろ、表現への内発性と素直さは子ども達の方が上かもしれない」と述べている。<sup>2)</sup>「接している裾野」が造形表現の共通事項である。造形表現は物質で視覚的・触覚的に表現することであり、色彩・形態・材料が重要な要素となる。色彩理論、形態理論、材料理解は保育者として身につけておきたい知識である。そして、保育・幼児教育で用いる表現材料、表現技法は一通り体験し、その特性を理解しておく必要がある。

養成校の学生の実態の研究がある。木村・牛丸（2017）は、養成校における重要な教育課題として、子どもの造形活動と造形表現に関する専門的知識と技能の修得をあげている。学生には造形能力と指導者としての関わりのスキルアップが必要とし、モダンテクニックの技法習得、表現材料の理解、ICT活用能力を目的とする授業を提案している。<sup>3)</sup>また、椎名（2017）は、造形表現の知識や技能がない保育者は造形表現の指導に自信がなく、結果的に、作品の完成を目指し表現のプロセスを疎かにする傾向があ

ることを指摘している。養成校の学生に、表現の自由を保障しプロセスに重点をおいた表現活動の事例報告を行っている。<sup>4)</sup>表現したいという子どもの思いを具体化するには、造形表現の知識・技能は必要である。

保育現場の実態の研究がある。堀内・杉本（2017）は、保育者の造形表現に対する意識を調査した。「学生時代に造形表現について学習しておきたかったと思うこと」に対する回答は「技法や材料についての知識と経験」が53.6%と圧倒的多数であった。多忙な保育者にとって、働きながら新たな学びをすることは難しく、養成校での時間をかけた実技の学習が必要と推察している。<sup>5)</sup>

養成校でも保育現場でも造形表現の知識・技能は必要と考えられている。そして、養成校で十分な学習ができなければ、保育現場で学び直しをする機会はより少なくなる。養成校で確実に必要な知識・技能を身につけることが求められている。

### 1-2 大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科の造形教育

大阪健康福祉短期大学 保育・幼児教育学科（以下、本学科）のカリキュラムで造形に関連する科目は5つある。造形Ⅰ、造形Ⅱ、教材研究B（おもちゃ・製作あそび）（以下、教材研究B）、児童文化、総合表現である。児童文化と総合表現は音楽、身体表現、言語表現を含む科目である。したがって、造形が主となっているのは造形Ⅰ、造形Ⅱ、教材研究Bの3つである。この3科目はカリキュラム・ポリシーの「子どもの育ちを支える」ために必要な力を身に付けることを目標にした科目である。保育や子どもの発達に関する基礎的な知識・技能に関する科目であり、保育実習前に学ぶ内容、実習を踏まえて深める内容を想定している。

造形Ⅰは必修科目である。造形の基礎的な知識・技能の習得を目指している。造形Ⅱと教材研究Bは選択科目である。造形Ⅱは幼児を、教材研究Bは乳幼児を対象とした実践的な活動を想定している。基礎学習の造形Ⅰがあり、その上に応用学習の造形Ⅱと教材研究Bがあるという構造である。

### 1-3 造形Ⅱ

造形Ⅱは1年次の科目である。2019年度は2セメスターに開講した。1年生45人中23人が選択し受講した(男性2人、女性21人)。本学科では入学直後に科目履修したのち、2セメスター開始前に履修変更ができる。1セメスターで造形Ⅰの学習をえているため、造形Ⅱを選択した学生は、授業者の方針を理解したうえで受講している。

造形Ⅰの表現活動は基本的に個人制作であった。造形Ⅱは半数以上の題材で共同制作を取り入れた。造形Ⅱの学習内容は以下の通りである。

- ①「描画材を用いた表現」…個人でスクラッチ、にじみ、デカルコマニーの制作をし、全員で鑑賞をする。
- ②「版を用いた表現」…個人でスタンプング、ステンシル、スチレン版画の制作をし、全員で鑑賞をする。
- ③「食材を用いた表現」…指定されたグループで小麦粉粘土を主に用いた制作をし、全員で鑑賞をする。
- ④「人工素材を用いた表現」…指定されたグループで樹脂製品を主に用いた制作をし、全員で鑑賞をする。
- ⑤「造形表現活動指導案」…①～④の活動から題材を1つ選び、個人で指導案を作成する。
- ⑥「壁面構成」…任意のグループで様々な材料を用いた壁面の制作をし、全員で鑑賞をする。

## 2 壁面

本稿で取り上げる「壁面構成」は造形Ⅱの学習である。ここで壁面について概観する。

### 2-1 壁面の起源と現状

保育室・教室の環境に欠かせないものとして壁面がある。日本の壁面の始まりは明治期だと考えられている。鈴木(1997)は、保育室内の黒板面に起源があるとしている。欧米の文化の流入に伴い「室内の装飾」へと変化した。保育者の制作した装飾に、子どもの作品が加わるようになり、さらに、単なる装飾や作品展示から、子どもの実生活に即し、子ども

もが喜ぶ装飾へと発展した。大正期には、広い壁面空間を活用し、生活をテーマとし、子どもや動物をモチーフとする現代の壁面と同様な壁面が生まれた。<sup>6)7)</sup>このように、壁面は日本の保育に定着していった。

豊泉(1995)は壁面を保育空間におけるインテリアデザインと位置づけ、保育現場にアンケート調査を行った。多くの保育者は壁面を、環境による教育・保育という観点から肯定的にとらえていた。その一方で、表現の画一化、予算不足、保育者の負担感という課題のあることが明らかになった。<sup>8)</sup>この調査から20年後に、正岡・團野(2015)は幼稚園・保育所における壁面の実態を調査し、以下のことが明らかになった。表現方法は平面と立体の混合型が多い。内容は子どもの作品、季節、行事を取り入れたものが多い。子どもが主体となって造形表現を行い、保育者が壁面全体を構成することが多い。造形表現活動の一環として壁面を利用し、装飾性よりも教育的な意味が強い。<sup>9)</sup>保育室・教室の装飾として生まれた壁面が、教育的な役割を担うようになったのである。

保育現場で日常的に活用されている壁面を、養成校の題材とした授業実践報告がある。西村(2017)は造形表現の題材として壁面に取り組み、「切り紙」と「にじみ絵」をモチーフとした壁面を制作し、学内の展示スペースに1年間展示した。課題として、子どもとの関わりから制作できる題材設定の必要性をあげている。<sup>10)</sup>

### 2-2 造形表現のテキスト、保育雑誌

養成校における壁面の授業実践報告は少ない。そこで、養成校で活用される造形表現のテキストにおける壁面の取り扱いをしてみる。『造形表現』(1994)では「壁面製作」として2項で取り上げている。<sup>11)</sup>『幼児教育の基礎知識』(1999)では「空間を飾る」として1項、「春の環境づくり」、「夏の環境づくり」、「秋の環境づくり」、「冬の環境づくり」として各1項の合計4項にわたって取り上げている。<sup>12)</sup>『保育をひらく造形表現』(2008)では、「壁面空間」、「四季を飾る」、「季節感や思い出を飾る」として6項に

わたって取り上げている。<sup>13)</sup>『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現の造形教材』(2018)では「魅力的な壁面装飾の制作を求めて」として2項で取り上げている。<sup>14)</sup>『保育をひらく造形表現』が詳しく取り上げている以外、他のテキストでは詳しく取り上げている事例は少ない。

次に、保育雑誌における壁面の取り扱いを見てみる。幡野・山根・小田倉(2009)が指摘しているように、壁面のモチーフの画一化の要因の1つとして保育雑誌の存在がある。<sup>15)</sup>多くの保育雑誌には壁面の掲載ページがある。『Pot』(チャイルド本社刊)、『PuriPuri』(世界文化社刊)、『保育とカリキュラム』(ひかりのくに株式会社刊)、『ひろば』(株式会社メイト刊)、『Paprika』(学研刊)には壁面の掲載ページがある。多忙な保育者にとって、毎月あるいは数カ月おきに壁面を制作することは相当な負担と推測される。保育雑誌に掲載されている題材をそのまま活用することは容易に想像できる。題材に用いられるキャラクター風のモチーフや形式的な表現に対し保育現場では否定的な見方がある。その一方で、「カワイイ」表現として肯定的に受け止める保育者もいる。

インターネットの普及した現代では、保育のコンテンツをWEBから入手することが多くなった。壁面の題材もWEBで手軽に入手できる。WEBの壁面は保育雑誌同様、表現の画一性が確認できる。保育雑誌と異なるのは表現の一貫性がないことである。画一的ではあるが様々なスタイルの題材を選ぶことが可能になっている。

### 2-3 保育現場と壁面

保育・幼児教育は遊びを通して、環境を通して行うものである。物的環境としての壁面に着目して、装飾から教育的効果を期待されるようになったのは自然なことである。保育現場では教育的効果を期待されながらも、保育者の負担感、予算、表現の問題がある。保育雑誌やWEBの題材に頼ることなく、毎月のように壁面を制作するためには、養成校の造形表現の学習で壁面制作に取り組む必要がある。

## 3 授業実践

### 3-1 「壁面構成」

#### 3-1-1 「壁面構成」の概要

期間:2019年12月17日~2020年1月28日 全6回(450分)

\*6回中、初回と最終回は授業時間の半分(45分)で活動した。

授業形態:カリキュラム構成の都合上、他の科目(音楽)との抱き合わせとなり、A・Bの2グループに分けて実施した。Aグループ10人、Bグループ13人である。

学習目標:「表現を楽しみ室内空間を装飾する」

#### 3-1-2 題材設定の理由

養成校における造形表現の学習は保育・幼児教育の手段として造形表現を用いることを学ぶ活動である。自己表現のための表現活動ではない。保育現場の実態を踏まえて学習内容を設定する必要がある。これまで見てきたように、保育現場で壁面の必要性は確認されている。「壁面構成」は学んだ知識・技能にもとづいた集大成の題材として適切だと考えた。以下に壁面を活用する理由を述べる。

##### ①保育・幼児教育に対する深い学び

保育現場での活用を前提とする壁面を題材とするため、保育・幼児教育における造形表現の意義を考える機会になることを期待した。合わせて、子どもの表現を取り入れることで、教材研究もできると考えた。

##### ②造形表現の知識・技能の習得

壁面の主題は様々な設定できる。その中でモチーフや表現形式や表現方法も自由に選ぶことができる。一斉制作の形態を取らざるを得ない本学科の授業の中で、様々な表現活動に取り組むことができ、効率的な知識・技能の習得になることを期待した。

##### ③共同制作の効果

広く大きい壁面を表現の場とすることで複数での活動となり、共同制作の活動形態をとることになる。他者と協力することで、コミュニケーション能力が高まることを期待した。

#### ④空間の活用

本学科は2018年4月に開学し、同年9月より現在の建物で教育活動を行っている。講義棟2棟、管理棟1棟の3棟で構成されている。教育活動を目的としないでつくられた建物を改修しているため、機能性を無視した独特な空間が多い。そのような空間を展示空間と想定することで、豊かな表現が生まれることを期待した。また、広い空間を活用してダイナミックな表現が生まれることを期待した。そして、学内環境の整美にも貢献できると考えた。

#### 3-1-3 学習の流れ

構想 [2回、135分]

- ①受講生23名を5つのグループに編成する。メンバー構成は学生自身が決める。
- ②グループ内で話し合い、主題、題材、表現方法を決定する。
- ③アイデアスケッチを描き、制作に必要な用具・材料を確認する。備品にない材料があれば購入を申請する。アイデアスケッチは提出し、授業者のチェックを受ける。
- ④活動計画を立て、グループ内の役割分担を決定する。活動計画表は提出し授業者のチェックを受ける。

表現と展示 [3回、270分]

- ①活動計画にしたがい表現活動を行う。表現活動の中で変更が生まれた場合は授業者に相談する。
- ②想定した学内の壁面空間に展示する。

鑑賞と学習の振り返り [1回、45分]

- ①学内に展示された作品を鑑賞し、鑑賞ワークシートに記述する。
- ②鑑賞して感じ取ったことを発表する。
- ③学習の振り返りをし、ワークシートに記述する。

#### 3-1-4 制作の条件

- ・展示可能な学内の空間を装飾する。各講義室、教員の研究室、事務センターは不可。
- ・空間の特性を活かした装飾とする。壁面空間以外に天井や窓ガラスを活用してもよい。
- ・季節を主題とする。ただし、季節は特定の月にはしない。冬はよいが12月は不可。

- ・表現は平面表現および半立体表現とする。造形Ⅰ、造形Ⅱの学習を活かす。
- ・各グループで共同制作をする。グループ内で話し合い、主題、モチーフ、表現材料、表現方法、役割分担を決める。特定のメンバーに負担が集中しないようにする。
- ・授業時間内の活動とする。

#### 3-1-5 モチーフの条件

- ・子どもの生活にふさわしいものとする。
- ・子どもの表現を取り入れることを想定し（子どもの表現として学生が制作する）、保育者と想定した大人の表現と組み合わせる。
- ・著作権に留意し、既存のキャラクターは不可とする。マンガ的・アニメ的表現は認める。

#### 3-2 学習の様子

「壁面構成」の学習の様子を報告する。文中の授業者は筆者のことである。学生の感想文は明らかな誤字以外は原文のままとし、用語の記述は統一した。なお、展示をした後の鑑賞活動は、AグループとBグループに分かれて行った。その詳細は割愛する。

#### 3-2-1 A-1 グループ（女性5人）

構想

夏を主題とした。第1講義棟2階、階段横の高さ2.4m、幅2.7mの壁面を展示空間と想定した。第1講義棟の中では比較的広い、掲示物等のない壁面空間である。子どもの表現として、折紙でヒマワリを表現することを考えた。この案に対し授業者は、作業性が強く、子ども一人ひとりの思いが反映されないとして変更を求めた。話し合いの結果、ヒマワリの中心部にパスで子どもが自分の顔を描くという案となった。大人の表現としては、折紙で夏の虫（カブトムシ、クワガタムシ）を表現することとした。さらに、基底材として色模造紙を用いることを構想し、空に水色の、地面（ヒマワリ畑）に黄緑の色模造紙を使うこととした<sup>注1)</sup>。

表現活動

ヒマワリの花びらはメンバー全員で折り、その他の活動は分担して行った。活動する中でいくつかの変更を行った。黄色1色としていたヒマワリの花び

らには、オレンジ色を加えてアクセントとし、2色の配列をランダムにした。花びらが同一の形状なため、規則的な配列すると人工的になることに気づいた。子どもの顔を描いた円形の画用紙の縁にヒマワリの花びらを半立体状に表現した。これに伴い、空の雲にも立体感があるとよいと考え、綿を用いて表現した。さらに、折紙のモチーフを増やした(セミ、チョウ、トリ)。授業者は、モチーフを基底材の模造紙に構成する際に、現実にとらわれることなく自由に配置することを助言した。

#### 展示

当初想定した壁面全体の中心に展示した。モチーフをあらかじめ色模造紙に貼っていたため、展示はスムーズに行うことができた。

#### 学生の感想

- ・グループで壁面の構成を考えて、制作するのが楽しかったです。子どもがどのようなものにする楽しんでつくって見るか考えるのが大変だったけど、顔をかいてもらうというアイデアが出てよかったです。
- ・壁面構成を1から考えてつくるのは少し大変だったけど、子どもの表現をどのようにするのかなど、その季節に合わせたもの考えるのは楽しかったです。他のグループのも見て、こんな方法もあったかととても勉強になりました。

#### 授業者の所見

学生それぞれがアイデアを出し合い、作業性の高い活動は全員が協力して行った。1年生が講義を受けることの多い第1講義室に一番近い空間を選び、コントラストの強い配色で表現した。大学での1日の始まりに誰もが目にする場所に、元気が出るような壁面をつくりたいという思いが反映された。表現活動が進む中で次々と案が発展していったことは評価できる。壁面空間全体を活かしきれなかったことが課題である。



A-1 グループの作品

### 3-2-2 A-2 グループ (男性1人、女性3人)

#### 構想

梅雨を主題とした。第1講義棟1階の窓上の壁面を展示空間と想定した。授業者は全く想定していなかった空間で、学生は日常生活の中で何か装飾があればよいと感じていた。子どもの表現として、アジサイを色和紙の貼り絵で表現することを考えた<sup>注2)</sup>。展示を想定した空間の大きさを測り(高さ56cm、幅127cm)、同面積の黒模造紙を用意し基底材として使うこととした。大人の表現としては、雫のモビールをつくることとした。

#### 表現活動

アジサイの花にはききょういろ、そらいろ、みずいろの3色、葉にはふかみどりの色和紙を用いた。手で揉んでテクスチャーをつけ、黒模造紙に半立体状に構成した。これだけでは華やかさに欠けると感じ、花のところどころにラメ粉を接着剤で塗布するというアイデアが加わった。雫のモビールをマーブリングで表現したいという学生の要望に対して、授業者は次の方法を提案した。吸水性の高いそめ用和紙にマーブリングをする。モビール自体の耐久性が必要なため画用紙を支持体とする。画用紙の片面にテグスを接着したのち、マーブリングをしたそめ用和紙を両面に貼り雫のパーツとする。モビールを制作する中で、雫のパーツとパーツの間に球状のビーズを挟むというアイデアが加わった。

## 展示

当初想定した場所に展示した。脚立を使わないと展示できない高所であるため、安全に留意した。しかし、色和紙のアジサイ、8本の雫のモビールを合わせると予想外の重さとなり、また、壁面と接着に用いた両面テープの相性が悪く、展示後数日で剥がれ始めた。釘で接合することで展示の状態を保持した。

## 学生の感想

- ・壁面の制作は初めてで、全然、想像がつかなかったけど、自分が思い描いたものがみんなの作品として、みんなで協力してつくれたことがとても嬉しかったです。子どもらしさとか、子ども向けとか全く意識できていなかったのも、もっと意識するべきだと思いました。
- ・グループで協力して活動し、色んなアイデアを集めてつくることができました。他のグループの作品を見ることで、保育の現場で実際に使えるような技法を知ることができ勉強になった。

## 授業者の所見

造形表現に強い関心を持つ学生2名がアイデアを出し、活動を主導した。表現活動は分担して行った。子どもの表現を取り入れた保育室内の装飾としては完成されすぎているが、学生の美的感覚や感性の育成、学内環境の整備という点で評価できる。展示の状態から支持体の黒模造紙は窓枠の色を意識したことがわかる。空間を活かした展示として評価できる。



A-2 グループの作品

## 3-2-3 B-1 グループ（女性5人）

### 構想

梅雨を主題とした。第2講義棟の階段壁面を展示空間と想定した。学内では最も広い壁面空間である。「壁面構成」の開始までは求職票などの進路就職情報を掲示していた。どのような題材でも展示しやすく、有効に活用できる空間である。壁面全体は矩形ではないが、その中で高さ4.1m、幅2.6mの範囲を展示空間とした。子どもの表現として、折紙でアジサイを表現することと、色画用紙、紙皿、パスとマーカーでカタツムリを表現することの2つを考えた。授業者は、折紙は子ども1人ひとりの思いが反映されず、また、この2つのモチーフだけでは広い壁面空間に負けてしまうと考え、もう1つモチーフを加えることを求めた。話し合いの結果、紙皿、モール、パスを用いた半立体の傘という案が加わった。大人の表現としては、カラフルな雲から落ちるカラフルな雫のモビールと、色画用紙のはり絵で雨合羽を着た2人の子どもを表現することとした。

### 表現活動

モチーフが多く、グループの中で分担して表現活動を行った。活動する中で当初の構想からいくつか変更を行った。上部の雲に綿を貼りやわらかい表現とした。画用紙から円形に切り出すことを想定していた半立体の傘は紙皿を活用して表現した。これはカタツムリの殻に用いていた紙皿の利用である。円形の紙皿をそのまま使えばよいと考えた。1粒に1色を想定していた雫のモビールは、3色3枚の色紙を貼り合わせた立体的な表現となった。部分的に金紙や銀紙を使いアクセントとした。また、下端にはアルミ箔を丸めた玉をつけた。

### 展示

当初想定した場所に展示した。授業者は構想段階の構図にとらわれず、広い壁面を活かすことを提案した。また、各モチーフのバランスを考えることを求めた。壁面を前にして話し合い、いくつかの変更を行った。雨合羽を着た2人の子どもは中心に配置し、アジサイとカタツムリのモチーフは左右で非対

称になるように高さを変えた。また、半立体の傘を釣り下げる糸を湾曲させ、上の傘を受け止める形状とした。

#### 学生の感想

- ・他のグループの作品を全て見て、どの作品もかぶりがなく、個性的な表現がたくさんあり、見ていて興奮しました。将来、壁面構成を考えて制作する場面が出てくると思うので、この授業を活かし頑張っていきたいと思いました。
- ・グループのみんなと意見を出し合って、つくるときも試行錯誤しながら取り組んだ。他のグループの作品を見て、グループによって技法も様々で、今後の参考にしようと思った。子どもの作品を際立たせるためには、どうしたらよいかということをもっと深く考えて、次回は取り組みたいと思う。

#### 授業者の所見

同じ梅雨を主題としながら、A-2 グループとは全く異なる表現になった。室内で過ごすことが多くなる時期にカラフルな色合いによる装飾をすることで、子どもたちに明るい気持ちで梅雨時を送って欲しいという思いが反映された。子どもの表現と想定した表現を多数取り入れ、保育現場でも活用可能な表現となったと評価できる。



B-1 グループの作品

#### 3-2-4 B-2 グループ（男性1人、女性3人）

##### 構想

春を主題とした。管理棟1階、集会室のガラス面

を展示空間と想定した。高さ2.8m、幅1.9mである。後述のB-3グループと同じ空間となり、授業者は両グループに確認を取った。両グループの了承を経て同一空間内の展示を認めた。B-2グループは集会室前方のガラス面である。子どもの表現として、ゆびえのぐを用いた手形のスタンプングでサクラを表現することを考えた。大人の表現としては、オーロラ色紙、プリント色紙を用いた春の虫（チョウ、ハチ、テントウムシ、クモ）のモビール、色紙を用いた動物（ウサギ、クマ）と植物（チューリップ、タンポポ、クローバー）の貼り絵を考えた。背景に色模造紙（水色と黄緑）を用いることを想定していたが、授業者は背景が不要であることを指摘した。話し合いの結果、背景は用いずにガラス面にモチーフを貼ることとなった。

##### 表現活動

表現活動をする中でいくつかの変更を行った。貼り絵の動物はパンダとライオンになり、植物はチューリップとクローバーになった。ウサギとクマでは木の幹と色合いが似通うため効果が薄いと考え、また、ライオンに黄色を使ったため同色のタンポポをやめることとした。春の楽しさを色彩で表現するためにカラフルな配色とした。春の虫のモビールは3連のチョウと単独のハチをモチーフとし、テントウムシとクモは貼り絵とした。授業者はサクラの表現について、手形を押す方向や密度に変化をつけて自然なサクラらしさを表現することを提案し、木の幹には動物や植物の貼り絵とは表現の差をつけることを求めた。話し合いの結果、木の幹には同系色の色画用紙3色を用い、手で揉んでテクスチャーをつけ、半立体状に表現することとなった。また、手形のランダムな表現から、サクラの花の輪郭はちぎった方がよいと考え、より自然な感じとなった。

##### 展示

当初想定した場所から変更したいという要望が出たため、授業者は集会室入口、第2講義棟1階の壁面空間、第2講義棟の階段壁面の3か所を提案した。話し合いの結果、集会室入口の壁面を展示空間に選

んだ。高さ 2.2m、幅 1.9m である。集会室入口の空間は外部扉と内部扉に挟まれた、湾曲した壁面を持つ狭い空間である。前述のように本学科の建物には独特な空間がいくつかある。集会室入口もそのような空間である。展示に当たって授業者は床面より高い位置に基底線を想定してモチーフを貼ることを提案した。また、左右対称の配置を避け、バランスを取ることを求めた。当初の予定を変更した狭い空間での展示は難航した。壁面が粗面であり、両面テープの接着だけでは不十分であったため、見た目はよくないが透明ビニールテープでモチーフの上から接着して展示した。

学生の感想

- ・初めはどのようなものをつくろうか、とても迷っていました。グループの人と協力して、よい作品をつくることができました。他のグループの作品も見て、よいところなどを見つけることができてよかったです。
- ・自分たちでテーマを考え、制作するのはとても楽しかった。鑑賞の際に様々な表現の仕方を知ることができたのでよかった。

授業者の所見

学生それぞれがアイデアを出し合い、構想をまとめることに時間がかかった。構想が煮詰まらないまま表現活動に入ったため、変更を繰り返すことになった。また学習の趣旨からすると、途中で展示空間を変えることはよいとはいえない。しかし、結果的に、大きなモチーフを狭い空間に展示することで迫力のある表現となった。当初の構想に比べると実際の展示の方がよいと評価できる。また、音楽の授業と学生の休憩場所を兼ね、多数の学生が出入りする集会室の入口に装飾が施されたことは、学内環境の整備という点で評価できる。



B-2 グループの作品

### 3-2-5 B-3 グループ（女性 5 人）

構想

冬を主題とした。管理棟 1 階、集会室のガラス面を展示空間と想定した。前述したように、B-2 グループと同じ空間となった。B-3 グループは集会室後方のガラス面である。制作期間が選んだ季節と同じ冬(12~1月)であり、雪が積もった時、窓外の景色と呼応することを期待しての想定であった。子どもの表現として、色画用紙、パス、毛糸でミトンを表現することを考えた。授業者はミトンの大きさに変化をつけることを提案した。大人の表現としては、フェルトで雪ダルマ、雪ウサギ、雪を、色画用紙とマーカーを用いた男女の子どもの貼り絵を考えた。中心に位置し存在感のある雪ダルマも子どもの表現にできないかを検討していたが、雪の質感を感じさせるフェルト素材は子どもには扱いにくいとの結論となり、大人の表現となった。

表現活動

モチーフが多く、グループの中で分担して表現活動を行った。ミトンは雪の白さとコントラストを考え、濃い目の色合いとし、大中小の 3 種類で表現した。ミトンの形状がハートに似ていることから、隠れハートをつくることを思いついた。当初の構想

から変えたのは雪ダルマと2人の子どものモチーフである。情景にこだわる必要はないと考え、子どもが雪ダルマをつくっている場面は、雪ダルマは中央のまま、男女の位置を逆にした。

#### 展示

当初想定した場所に展示した。授業者は、縦長のガラス面に対して各モチーフのバランスを考えると、ミトンの配置に変化をつけることを提案した。1人の学生が全体を見渡しバランスを確認しながら、他の学生に指示を出して展示をした。前述の隠れハートもさりげなく紛れ込ませた。展示をする中で、ミトンが雪を包んでいるというアイデアが生まれて貼り直しをした。しかし、接着用の両面テープがガラス面に残り、剥がしとることに苦労した。

#### 学生の感想

- ・みんなで協力して楽しくつくることができた。子どもの表現の仕方を考えることが勉強になった。みんなかわいかったたり、オシャレだったたり、大人の表現も感じられてよかった。
- ・全員で協力して楽しく制作できた。窓ガラスに貼ることで、外の風景といい感じになると思ったが、雪が降らず残念だった。

#### 授業者の所見

リーダーシップを取れる学生が中心となり、他の学生もそれぞれの役割を果たした。5つのグループの中では当初の構想からの変更があまりなく、最も活動がスムーズに進んだ。活動の中で遊び心のある表現や展示が生まれた。単なる作業ではない造形表現活動として評価できる。また、展示期間中に雪は降らなかったが、屋外環境の利用を試みた表現として評価できる。子どもの表現が中心とならず、大人の表現が中心となったことが課題である。



B-3 グループの作品

### 3-3-6 学習の総括

造形Ⅱの最終課題で学生は熱心に活動した。条件をふまえながら題材やモチーフを考える自由があり、学生自身でグループを編成したこともプラスに作用したと考える。活動の1カ月前に10日間の保育所実習を終えていたため、保育現場の様子がより明確になり、現場に即した活動であることも意欲につながったと考える。

全てのグループに共通する評価として次のことがいえる。

#### ①保育・幼児教育に対する深い学び

保育者を目指す学習では、活動の中で子どもの存在を想定しなければならない。子どもの表現を取り入れることで、子どもに適したモチーフ、表現材料、表現方法を深く考えることになった。また、自分で制作することで、表現の適不適を確認する機会となった。

#### ②造形表現の知識・技能の習得

パスやマーカーを用いた描画表現、絵具を用いた版表現、紙素材を用いた表現、異素材を組み合わせた表現、モビール、折紙など様々な表現に取り組み、新たな知識・技能を習得することができた。

#### ③共同制作による多様な学び

学習活動のあらゆる場面で学びがあった。個人制作であれば、鑑賞の場面で学びの共有は行われるが、他の場面での共有は難しい。共同制作とすることで、

構想、表現活動、展示の中でも学びの共有があり多様な学習ができた。

#### ④学内空間の活用

本学科の様々な空間を展示空間と想定したことで、空間の特性を活かした表現につながった。ニュートラルな平面空間であれば発想できないような、平面表現と半立体表現の融合した豊かな表現が生まれた。また、広い空間に展示することでダイナミックな表現につながった。学内の各所を装飾することで学内環境の整美にも貢献した。

#### ⑤学生自身の表現意欲の高まり

表現活動が好きで造形Ⅱを選んだ学生にとっては、条件とらわれずに表現したいという思いもあったと考えられる。保育者と想定した大人の表現を取り入れることで、自由な活動が保障され表現意欲が高まった。

課題として次のことがいえる。

#### ①子どもの思いを反映する適切な表現方法

折紙を子どもの表現とする発想があり、実際に活用した。表現活動の中で指摘したことであるが、子ども1人ひとりの個性や思いを表現する題材としては不適切である。保育・幼児教育に活用できる造形表現は様々あり、この点では造形Ⅰ、造形Ⅱの学習経験が十分に活かされていなかった。要因の1つとして、この学年の学生から入学前学習を課す取り組みを始め、多くの学生が、表現系の課題の中から折紙貼り絵を選択した。その経験から学生の中に「保育・幼児教育の造形表現＝折紙」という図式ができていた可能性がある。

#### ②適切な展示方法の提示

支持体の壁面やガラス面とモチーフと接合の問題があった。展示は見た目のよさと物理的な条件を両立させなければならない。この部分は授業者が事前に把握して、最も適切な展示方法を提示しなければならないことであった。

### 3-3 学生の評価

造形Ⅱの学習後、学習全体と各題材についてアンケート調査を行った。「壁面構成」以外の各題材の調

査結果は割愛した。

#### 3-3-1 造形Ⅱの選択理由

造形Ⅱを選んだ理由を記述の回答で求め、その内容を整理して分類した。最も多かったのが、「造形Ⅱの学習に期待したから」の30.4%であった。続いて、「表現活動が好きだから」と「造形Ⅰの学習がよかったから」の26.1%であった。以下、「保育現場での活用に期待したから」の17.4%、「テストがない」の8.4%、「美術に親しみたい」の4.3%であった。

#### 3-3-2 「壁面構成」の学習について

「壁面構成」の学習成果を選択の回答で求めた。選択肢は、「心が豊かになった」、「構想力が身についた」、「表現力がついた」、「美術作品に親しむことができた」、「協力して制作する力がついた」の5つである。「心が豊かになった」は95.7%、「構想力が身についた」は91.3%、「表現力がついた」は91.3%、「美術作品に親しむことができた」は95.7%、「協力して制作する力がついた」は95.7%であった。

また、「壁面構成」は保育・幼児教育の表現活動に役立つと思うかの可否は、「そう思う」が95.7%、回答なしが4.3%であった。

可否の理由を記述で求め、内容を整理して分類した。最も多かったのが「保育現場での活用ができるから」と「協力して活動ができたから」の39.1%、続いて、「展示や装飾の学習になったから」の34.8%であった。以下、「表現技能を習得できたから」「楽しい活動だったから」の13.0%、「材料の体験ができたから」、「季節感を表現できたから」の8.7%であった。他の回答として「達成感・満足感があつたから」「多様なアイデアを学ぶことができたから」があつた。

#### 3-3-3 考察

造形Ⅱを選んだ学生は、表現活動に自体に対する興味・関心よりも、入学後の学習経験と卒業後に保育現場で働くときに役立つという観点で選んだ学生が多かったといえる。そのような学生が「壁面構成」を通して学習効果があつたと答えたことは、「壁面構成」は学生の期待通りの学習であった。保育現場での活用にも通じる養成校の造形表現の学習として適

切であったといえる。

## 4 保育者のアンケート

### 4-1 アンケート調査

養成校における授業が適切であったかどうかは、その授業を受けた学生が卒業し、保育現場で働く中で判断することが最もよいと考える。本学科は今春（2020年3月）に1期生が卒業し保育現場で働いている。このような状態では、授業の適切さはまだ判断できないと考える。そこで、島根県松江市とその周辺の保育所・認定こども園に勤務する保育者を対象に、「壁面構成」についてアンケート調査を行った。

#### 4-1-1 アンケートの概要

対象者：保育者 100 人 回収率：98%

調査期間：2020年8月3日～8月17日

調査方法：送付したアンケート用紙に選択および記述による回答。

保育者の内訳：男性 3 人、女性 92 人、性別不明 3 人 20代 39 人、30代 29 人、40代 18 人、50代以上 12 人

#### 4-1-2 アンケートを依頼した施設とその概要

公立の2施設と私立8施設の、合わせて10施設の協力を得ることができた。公立の施設は異なる自治体が運営し、どちらも1960年代に開所している。私立の施設のうち7施設は社会福祉法人が、1施設は株式会社が運営している。社会福祉法人運営の施設のうち、単独の運営は2施設、複数園の運営は5施設である。開園が最も古い施設は1927年に託児所として開設されている。最も新しい施設は2015年に開園している。1960年代に2園、1970年代に1園、1980年代に1園、2000年代に1園開園している。株式会社が運営の施設は2013年に開所している。

#### 4-1-3 アンケートを依頼した施設を選んだ理由

保育現場ではそれぞれの運営理念、保育方針、保育目標等によって行われる保育が異なる。公立の施設であれば、自治体の規模によって多少は異なるものの、それほど大きな差はない。むしろ、私立の施設が独自の保育を展開している。私立7施設の中には、保育室内に一切装飾をしない施設や、行事以外

ではほとんど造形表現活動をしない施設もある。また、開所・開園の年を見てみると100年近い伝統のある施設から、数年前に開園した施設までである。このように、多様な施設で働いている保育者の意見を集めることで、より正確なデータを得ることができると考えた。

なお、幼稚園がない理由として、島根県松江市とその周辺では幼稚園のニーズが減っているため、公立の幼稚園は子どもの数が少なく、また、私立の幼稚園は数が少ないことから、保育所と認定こども園を対象とした。

### 4-2 アンケートの結果

#### 4-2-1 「壁面構成」の可否

「壁面構成」の可否を選択肢による回答で求めた。選択肢は「強くそう思う」、「そう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそう思わない」、「そう思わない」の5つである。

全体では、「強くそう思う」が18.4%、「そう思う」が57.1%、「どちらともいえない」が14.3%、「あまりそう思わない」が2.0%、そう思わないが7.1%、回答不明が1.0%であった。「強くそう思う」、「そう思う」を合わせた肯定的な回答は75.5%であった。「あまりそう思わない」、「そう思わない」を合わせた否定的な回答は9.2%であった。

次に年代別に見てみる。

20代は、「強くそう思う」が25.6%、「そう思う」が59.0%、「どちらともいえない」が5.1%、「あまりそう思わない」が2.6%、そう思わないが7.7%であった。「強くそう思う」、「そう思う」を合わせた肯定的な回答は84.6%であった。「あまりそう思わない」、「そう思わない」を合わせた否定的な回答は(10.3%)であった。

30代は、「強くそう思う」が17.2%、「そう思う」が62.1%、「どちらともいえない」が17.2%、「あまりそう思わない」が3.4%、そう思わないが0%であった。「強くそう思う」、「そう思う」を合わせた肯定的な回答は79.3%であった。「あまりそう思わない」、「そう思わない」を合わせた否定的な回答は3.4%であった。

40代は、「強く思う」が5.6%、「そう思う」が50.0%、「どちらともいえない」が33.3%、「あまりそう思わない」が0%、そう思わないが5.6%、回答不明が5.6%であった。「強く思う」、「そう思う」を合わせた肯定的な回答は55.6%であった。「あまりそう思わない」と「そう思わない」を合わせた否定的な回答は5.6%であった。

50代以上は、「強く思う」が16.7%、「そう思う」が50.0%、「どちらともいえない」が8.3%、「あまりそう思わない」が0%、そう思わないが25.0%であった。「強く思う」と「そう思う」を合わせた肯定的な回答は66.7%であった。「あまりそう思わない」、「そう思わない」を合わせた否定的な回答は25.0%であった。(表1)

#### 4-2-2 「壁面構成」の可否の理由

可否の理由を選択肢による回答で求めた。

肯定的な選択肢は、「豊かな感性が培われる」、「造形材料の体験ができる」、「造形表現の技能が身につく」、「保育現場で活用できる」、「内容が楽しそうである」の6つである。否定的な選択肢は、「豊かな感性を培うには画一的である」、「養成校で体験することではない」、「表現が技巧的すぎる」、「保育現場での活用が難しい」、「やさしすぎる」、「難しすぎる」6つである。「特に理由はない」という選択肢も設け、選択肢以外の回答がある場合は記述で回答を求めた。回答は複数回答を可とした。

全体では、「保育現場で活用できる」が最も多く63.3%であった。次いで「造形材料の体験ができる」の54.1%であった。以下、「造形表現の技能が身につく」の50.0%、「豊かな感性が培われる」と「内容が楽しそうである」の32.7%、「豊かな感性を培うには画一的すぎる」の11.2%、「保育現場での活用が難しい」の3.1%、「特に理由はない」の2.0%であった。

選択肢以外の回答に9人が回答した。肯定的な内容としては「様々な技法が活用されている」(20代女性)、「子どもの活動を想像しながら制作をすることは意義がある」(30代女性)、「学生時代にしかできない時間をかけた活動である」(30代女性)、「子

どもに季節感を感じさせる学習である」(50代女性)という回答があった。否定的な内容としては「壁面が必要だと思わない」(20代女性)、「保育の中に壁面は不要」(20代女性)、「壁面構成の必要性を感じない」(40代女性)、「大人がつくりこみすぎた壁面は不要」(40代女性)という回答があった。肯定的・否定的以外の内容は「学習の過程が不明なため回答困難」(30代女性)、「もっとたくさんの素材を用意すべき」(40代女性)であった。

次に年代別に見てみる。

20代は、「保育現場で活用できる」が最も多く65.5%であった。次いで、「造形材料の体験ができる」の55.2%であった。以下、「造形表現の技能が身につく」の51.7%、「内容が楽しそうである」の38.5%、「豊かな感性が培われる」の33.3%、「豊かな感性を培うには画一的すぎる」の7.7%であった。

30代は、「保育現場で活用できる」が最も多く71.8%であった。次いで、「造形表現の技能が身につく」の48.7%であった。以下、「造形材料の体験ができる」の43.6%、「豊かな感性が培われる」と「内容が楽しそうである」の34.5%、「豊かな感性を培うには画一的すぎる」の3.4%であった。

40代は、「造形材料の体験ができる」が最も多く72.2%であった。次いで、「保育現場で活用できる」の50.0%であった。以下、「造形表現の技能が身につく」の44.4%、「豊かな感性が培われる」の33.3%、「内容が楽しそうである」の22.2%、「豊かな感性を培うには画一的すぎる」の16.7%、「保育現場での活用が難しい」と「特に理由はない」の5.6%であった。

50代以上の回答は、「造形材料の体験ができる」と「造形表現の技能が身につく」が最も多く58.3%であった。次いで、「保育現場で活用できる」の50.0%であった。以下、「豊かな感性を培うには画一的すぎる」の33.3%、「豊かな感性が培われる」と「内容が楽しそうである」の25.0%、「保育現場での活用が難しい」の16.7%、「表現が技巧的すぎる」の8.3%であった。(表2)

#### 4-2-3 分析と考察

「壁面構成」の可否は、全体でみると肯定的とする意見は75%を超え、一定の評価を得ることができた。年齢が低いほど肯定的にとらえる率が高く、年齢が上がると肯定的にとらえる率が下がる傾向にある。可否の理由は、全体では「保育現場で活用できる」最も多く、実際の保育に活用できることを想定した題材としては一定の評価を得ることができた。年代別にみると、20代と30代では「保育現場で活用できる」が最も多い。一方、40代と50代以上では「造形材料の体験ができる」が最も多くなり、20代と30代ではなかった「保育現場での活用が難しい」とする意見が出ている。壁面に対して、世代の感覚が異なると推測される。

## 5 まとめ

以上のように、本稿では、学内環境を活用した「壁面構成」の学習が養成校における造形表現指導として有効であることが明らかになった。

今後の課題として次のことがあげられる。「壁面構成」と同様の授業を他学で行っても効果があるのか検証する必要がある。授業者が代わっても、学内空間が代わっても、同様な効果のある授業を展開できるかどうかを検証することで、養成校における効果的な造形表現指導であることが明確になると考えられる。次に、「壁面構成」が養成校の授業の題材としてどのように取り上げられているかを調査し、他の養成校の実態を調べる必要がある。他学の実践を参考にし、交流を図ることで学生の指導につなげることができると思う。

今後は、保育現場の実態を調査し、現場の保育者と共に造形表現の授業を考えていきたい。そして、授業を通して学生を育て、保育現場の求める保育人材を輩出していきたい。

最後に、アンケートの協力をいただいた10施設の保育者の方々に感謝の意を捧げる。

## 付記

造形Ⅱを受講した学生の許可を得て写真を掲載し

た。

## 参考文献／引用文献／脚注

- 1) 加藤友彦 (2020)「保育者養成校における造形表現指に関する考察—多様な表現材料を用いた授業実践—」大阪健康福祉短期大学紀要 第19号 p.51-61
- 2) 高橋敏之 (2001)「幼児造形教育学に関する研究 保育者の専門性としての造形理解と幼年造形教育学の構築」日本保育学会誌『保育学研究』第39巻第1号 p.20-27
- 3) 木村安宏・牛丸和人 (2017)「これからの保育者養成における領域「表現」(造形)指導に関する提案」西九州大学短期大学部紀要 第48巻 p.29-35
- 4) 椎名澄子 (2017)「プロセスに重点をおいた造形表現の意味～表現本来のあり方を目指して～」旭川大学短期大学部紀要 第47号 p.59-60
- 5) 堀内秀雄・杉本亜鈴 (2017)「造形指導の現場と大学授業の実際から見る幼稚園教諭養成大学 造形カリキュラムのあり方」東京成徳短期大学紀要 第51号 p.73-83
- 6) 鈴木法子 (1997)「壁面構成とは何か 1—明治期の幼稚園における壁面構成の萌芽—」日本保育学会 第50回大会研究論文集 p.274-275
- 7) 鈴木法子 (1998)「壁面構成とは何か 2—大正期の「室内装飾」—」日本保育学会 第51回大会研究論文集 p.114-115
- 8) 豊泉尚美 (1995)「幼児教育におけるデザイン教育としての『壁面構成』: 幼稚園・保育園の壁面構成制作活動を中心として」日本デザイン学会 デザイン学研究 43巻5号 p.1-4
- 9) 正岡さち・團野真紀子 (2015)「『幼稚園・保育所における壁面構成』の事例報告」島根大学教育学部紀要 49 p.107-111
- 10) 西村愛子 (2017)「壁面製作についての一提案—造形表現の授業実践報告—」駒沢女子短期大学研究紀要 第50号 p.73-80
- 11) 花篤實・岡田愨吾編著 (1994)『造形表現』三晃書房

- 12) 花篤實監修 (1999) 『幼児教育の基礎知識』 建帛社
- 13) 槇英子 (2008) 『保育をひらく造形表現』 萌文書林
- 14) 樋口一成 (2018) 『幼児造形の基礎 乳幼児の造形表現の造形教材』 萌文書林
- 15) 幡野由理・山根直人・小田倉泉 (2009) 「保育環境における壁面装飾の意義 1 : 幼稚園教員・保育士への質問調査から」 埼玉大学紀要 (教育学部) 第 58 卷 2 号 p.171-181

注 1) 壁面自体を支持体とすることが「壁面構成」の学習意図であるが、「夏」の表現として青空が必要という学生の考えを尊重した。

注 2) 色和紙は比較的や高価なため保育現場ではどこでも使っているわけではないが、材料研究の意義があると考え使用を認めた。

〈表 1〉「壁面構成」の可否

	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
20代(%)	10人(26.6%)	23人(59.0%)	2人(5.1%)	1人(2.6%)	3人(7.7%)
30代(%)	5人(17.2%)	18人(62.1%)	5人(17.2%)	1人(2.6%)	0人(0%)
40代(%)	1人(5.6%)	9人(50.0%)	6人(33.3%)	0人(0%)	1人(5.6%)
50代以上(%)	2人(16.7%)	6人(33.3%)	1人(8.3%)	0人(0%)	3人(25.0%)
合計(%)	18人(18.4%)	56人(57.1%)	14人(14.3%)	2人(2.0%)	7人(7.1%)
	肯定的		どちらともいえない	否定的	
	74人(75.7%)		14人(14.3%)	9人(9.2%)	

〈表 2〉「壁面構成」可否の理由

	豊かな感性が培われる	造形材料の体験ができる	造形表現の技能が身につく	保育現場で活用できる	内容が楽しそうである	ある	豊かな感性を培うには画一的である	養成校で体験することではない	表現が技巧的すぎる	保育現場での活用が難しい	やさしすぎる・難しすぎる	特に理由はない	その他	
20代	13人	17人	19人	28人	15人	3人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	2人	
(%)	(33.3%)	(43.6%)	(48.3%)	(71.8%)	(38.5%)	(7.7%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(5.1%)	
30代	10人	16人	15人	19人	10人	1人	0人	0人	0人	0人	0人	0人	3人	
(%)	(34.5%)	(55.2%)	(51.7%)	(65.5%)	(34.5%)	(3.4%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(0%)	(13.8%)	
40代	6人	13人	8人	9人	4人	3人	0人	0人	0人	1人	0人	1人	3人	
(%)	(33.3%)	(72.2%)	(44.4%)	(50.0%)	(22.2%)	(16.7%)	(0%)	(0%)	(0%)	(16.7%)	(0%)	(5.6%)	(26.7%)	
50代以上	3人	7人	7人	6人	3人	4人	0人	1人	2人	0人	0人	0人	1人	
(%)	(25.0%)	(58.3%)	(58.3%)	(50.0%)	(25.0%)	(33.3%)	(0%)	(8.3%)	(16.7%)	(0%)	(0%)	(0%)	(8.3%)	
合計	32人	53人	49人	62人	32人	11人	0人	1人	3人	0人	1人	1人	9人	
(%)	(32.7%)	(54.1%)	(50.0%)	(63.3%)	(32.7%)	(11.2%)	(0%)	(1.0%)	(3.1%)	(0%)	(1.0%)	(1.0%)	(9.2%)	
	肯定的						否定的							

20代 : N=39 30代 : N=29 40代 : N=18 50代以上 : N=12 全体 : N=98

# Effects of Hekimen-Kosei on Teaching Modeling Expressions —Lesson Practice Utilizing the On-campus Environment —

Kato Tomohiko\*

## Abstract

This study examines that there is a learning effect by using "hekimen-kosei" as a theme in a class on modeling expressions used by a student who aims to become a childcare worker. Hekimen-kosei or wall mural is widely used as way of decorating the walls in nursery rooms and classrooms in childcare and early childhood education. By using the mural created on the wall with various pictures as a subject, we expected the following four effects:

- (1) The significance of modeling expressions in childcare and early childhood education can be considered.
- (2) Students can acquire various types of knowledge and skills related to modeling expressions in their learning activities.
- (3) By co-production, students can learn a variety of things in the scenes of conception, expression activities, exhibitions, and appreciation.
- (4) Students can clean up the campus environment by decorating the space.

The appropriateness of the subject matter and the learning effect were clarified through the state of the learning activity and the act of reflecting after the study. In addition, in order to verify whether this was a subject that could be used for the childcare worker, I conducted a questionnaire survey with childcare worker.

As a result, it was possible to obtain a certain amount of support from the childcare worker, and the appropriateness of the subject matter became clear.

A problem for future research would be to verify whether this classroom practice has the same effect on the learning activities associated with other types of study.

Key words: childcare worker training, modeling expression, "hekimen-kosei", lesson practice

---

\*Osaka College of Social Health and Welfare  
Contact Address : Kato Tomohiko  
〒690-0823 4280 Nishikawatsu-cho, Matsue, Shimane Prefecture  
Osaka College of Social Health and Welfare  
Department of Child Care and Welfare  
E-mail : t.kato@kenko-fukushi.ac.jp